# 第 17 回　日英・英語教育学会研究会

## —指導法研究の新たな展開—

**【日時】**　2017 年 3 月 18 日（土）
**【会場】**　長崎大学　教育学部棟教育学部 31 番教室
**【参加費】**　会員・非会員ともに無料
**【懇親会】**　17:30〜19:30　会場すぐ側の飲食店　会費 3500 円程度

**【プログラム】**

13:00　受付開始
13:30　挨拶
13:40　講演 I
　佐藤臨太郎（奈良教育大学）
　"Teaching English in the Japanese EFL environment: Can they learn *by using it* or *learn to use it*?"
15:00　講演 II
　亘理陽一（静岡大学）
　「英語授業にとって単元とはどのようなものか」
16:20　全体討論
　登壇者：佐藤臨太郎（奈良教育大学）
　　亘理陽一（静岡大学）
　　酒井英樹（信州大学・日英・英語教育学会会長）
　司会：　草薙邦広（広島大学）
17:00　謝辞および閉会のことば

**【お問い合わせ先】**

日英・英語教育学会事務局　清泉女学院大学　和田順一研究室
〒381-0085 長野県長野市上野 2 丁目 120-8 清泉女学院大学人間学部
電話 026-295-1343　　Email: wada [at] seisen-jc.ac.jp

講演 I:

# Teaching English in the Japanese EFL environment:

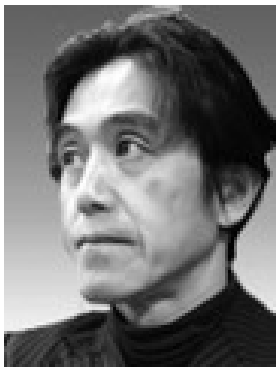
# Can they learn by using it or learn to use it?

## 佐藤臨太郎（Rintanro, Sato）

For many years, researchers have paid much attention to recent findings in second language acquisition (SLA) studies in order to develop effective teaching methods. I agree that there is an immediate need to develop our teaching approaches to improve learners' communicative abilities by referring to the empirical findings in SLA studies. However, in the English as a Foreign Language (EFL) environment in Japan, can junior and senior high school students *learn English by using it* as SLA findings have suggested? I take a position that there is a definite need to *learn to use it* (as well as *learn by using it).*In my WS style presentation, introducing some of my studies, I will discuss how we can teach grammar communicatively in English by using a modified Presentation–Practice- Production (PPP) approach with some basic principles shared by Communicative Language Teaching (CLT) and Task Based Language Teaching (TBLT).I *would like to make my presentation interactive with the audience. I welcome your active participation!*

(This presentation is based on the presentation at JASELE42 Symposium)

## 講師紹介　佐藤臨太郎先生



奈良教育大学英語教育講座教授。学校教育学博士（兵庫教育大学）。専門は，英語教育学・教室第二言語習得研究。特に，日本の中学校・高等学校における効果的な英語指導法，オーラルコミュニケーション能力の指導などに関心がある。近年の著作に，『日本人学習者に合った効果的英語教授法入門』（明治図書）がある。また，*The Journal of Asian TEFL*，*Asian EFL Journal*，*ARELE*，*JALT Journal*，***JACET Journal*** などの国内外の学術誌に論文多数。2013 年度全国英語教育学会教育奨励賞受賞。元ラグビー国体選手（北海道）。目下の趣味はマラソンと筋トレ。

講演 II:

# 英語授業にとって単元とはどのようなものか

## 亘理陽一（Yoichi, Watari）

英語教師にとって，外国語教育のアプローチやメソッドは，「どのように授業を組み立てるか」という問いの中で初めて意味を持ちます。どの指導法にも長所と課題があり，各自が自身の文脈に引きつけてそれを理解することが肝要ですが，その議論はややもすると一時間の授業，一つの活動，一つの文法項目のみに閉じたものとなりがちです。現状として，未だ十分とは言えない政策研究とそうした指導法・指導技術論の間で，それ以上に顧みられていないように思えるのが，具体的な授業構成の単位としての「単元」です。単元は，それ自体が内包と外延を探究すべき対象であると同時に，一連の授業を通じて目指すべき目標と計画を示し，終わりの時点でその結果が吟味されるという意味で，アセスメント・サイクルの基本を成すまとまりです。本講演では，個々の発問や文法指導を考える際にも単元レベルでの発想が重要となることを具体的に示しながら，英語授業実践・研究をより稔りあるものとするような単元の捉え方と単元構成について考えます。

## 講師紹介　亘理陽一先生

静岡大学教育学部准教授。北海道大学教育学研究科博士後期課程修了。博士（教育学）。静岡理工科大学教育開発センター特命講師，同総合情報学部講師，静岡大学教育学部講師を経て 2015 年より現職。専門は，英語教育学・教育方法学。文法指導の目的・内容・方法を中心とする、カリキュラム編成・授業実践・教師教育研究に関心がある。近年の著作に，『はじめての英語教育研究: 押さえておきたいコツとポイント』（共編著，研究社），『高校英語授業を知的にしたい: 内容理解・表面的会話中心の授業を超えて』（共編著，研究者），『学習英文法を見直したい』（共著，研究社）などがある。